

飼育レポート

さるっこの森の赤ちゃんたち

飼育展示担当 舘岡 幸枝

2018年6月29日、コモンマーモセットの赤ちゃんが産まれました。マーモセットは2頭出産することがほとんどなのですが、当園の「もも」は毎回3頭を出産します。マーモセットの乳首は人間と同じ2つなので、3頭に平等にお乳を与えることは非常に難しく、生後10日目には1頭が衰弱。人工哺乳するも残念ながら亡くなってしまいました。残った2頭は順調に育ち、現在は親から離れて活発に動き回っています。



コモンマーモセットの赤ちゃん(7月28日)

また、7月26日にはポリビアリスザルの赤ちゃんが産まれています。お母さんの「すず」は何度か出産を経験していますが、昨年は出産直前に不正出血が見られ、死産となってしまったのです。今年も徐々にお腹が大きくなるすずを横目に、無事に出産できるかとても心配でした。エサや温度、運動量などに気を遣いながら今か今かと待ち望んでいたある日の朝、すずの背中にちよこんと赤ちゃんの姿が。小さくも力強いその姿にほっと胸をなで下ろしました。まだまだ赤ちゃんたちにとっては厳しい暑さが続きますが、無事に育ってくれるよう今後も手助けをしていきたいと思えます。



リスザルの親子(8月8日)

ゆりが2回目の出産

飼育展示担当 関谷 藍子



生まれて8日後の様子(7月20日)

7月12日に、レッサーパンダの「ケンシン」と「ゆり」の間に、双子の赤ちゃんが誕生しました。ゆりにとって2年ぶり、2回目の出産です。

5月頃から、ゆりの寝室に産箱や産箱内の様子が観察できるカメラを設置し、エサや巣材となる笹の増量など、出産に向けた準備を進めていきました。6月に入ると、ゆりのお腹のふくらみがかなり目立ってきましたが、7月に入っても特に大きな変化はありませんでした。

しかし、7月12日の昼前から急に産箱内に多量の笹を運び込み、今までになくそわそわした様子になってきました。「いよいよかも…」と、動物園事務所でモニターを観察していたところ、その日の夜19時からいきみ始め、5分後には1頭目、20分後には2頭目を出

産しました。出産直後から夢中で仔の体をなめながら授乳するゆりの姿に母の愛情を感じ、胸が熱くなりました。

出産後は多少神経質になる母親もいるのですが、ゆりは2度目ということもあるのか、出産前と全く変わらない落ち着いた様子で子育てに励んでいます。子どもたちもお乳をよく飲み、ぐんぐん成長しています。最近では産箱内を活発に動き回り、時々外に這い出ようとして、ゆりに連れ戻される様子も見られます。8月上旬に行った初めての健康診断で、2頭ともオスと判明しました。子ども達の公開は今年10月頃を予定しています。ぜひ会いに来て下さい。



性別チェック(8月2日)

暑さをのり越え繁殖

飼育展示担当 佐々木 祐紀

今年も当園ではシロフクロウがふ化、育成しています。2014年から1組のペアが産卵、ふ化し無事に育成しはじめました。翌年からは新しいペアも加わり、2組のペアでの繁殖となりました。毎年、多くのヒナが育ち、他の動物園を新たな生活の場所として当園から移動しています。

シロフクロウの野生での生息地は気温が低い北極圏で、病原体も少ない環境ですが、日本の夏場の暑さは、シロフクロウにとっては体調を崩しやすく、色々な病気にかかりやすい環境です。当園では5月中旬に産卵し、梅雨のジメジメとした頃からヒナがふ化しはじめ、暑さの真っ最中に子育てが続きます。

繁殖はシロフクロウにとって大きな負担になります。展示場には日除けを設けたり、キーパー通路から管を通して卵を抱えているメスの付近へ送風したりするなど、いくらかでも親の負担を軽減する対策をとりました。それでも限界があり、梅雨時期に多くのヒナがふ化することから、エサやヒナの糞などで巣はあつという間に不衛生になってしまいます。しかし、ヒナが親に抱かれている間は掃除を行うために近づくことはできません。そのような状況から全てのヒナが育成することは難しい年もありました。

今年も暑さが厳しいですが2組のペアから4羽が無事に親と同じ大きさまで成長しました。残りの暑さを無事に乗り切ることができるようサポートしていきたいと思えます。



ヒナ(7月14日)



ヒナ(8月21日)

繁殖復活から7年目

飼育展示担当 櫻庭 美千代

今年も順調にチリーフラミンゴ1羽、ヨーロッパフラミンゴ2羽、計3羽のヒナが7月に元気にふ化しました。ヒナたちの羽は灰色で、親の羽根色からは想像のつかない容姿をしています。1週間ほどで巣立ちをし、最近では親のくちばしから真っ赤なフラミンゴミルクをもらいながら、エサのフードも少しずついばむようになってきました。タイミングが良ければ、まなタイムの直前にミルクを飲んでいることもあります。

一時途絶えていた繁殖を復活して今年で7年目になります。夏になればその年にふ化したフラミンゴのヒナと昨年にふ化した灰色の幼鳥たちを同時に見ることができると、じわじわとお客様にも浸透してきました。今年も産卵が例年よりやや遅く、少し心配でしたが、何組かのペアが産卵をして抱卵を始めると、お客様から「いつ頃ふ化しますか?」「親の羽下に抱かれてミルクを飲んでいる姿が見たい!」など昨年より多くの声を聞くことができました。

フラミンゴ舎前を通るときは、いつもより少し気にして覗いてみてください。もしかしたらヒナがミルクを飲んでいるかわいらしい姿に出会えるかもしれません。



チリーフラミンゴのヒナ(7月16日)



ヨーロッパフラミンゴのヒナ(7月31日)

動物病院から

新人獣医師として

獣医師 湯澤 菜穂子

この春より大森山動物園に配属となりました。大学卒業後、大森山動物園が初めての勤務先のため、獣医師としての能力はまだ十分ではありません。他の獣医師による治療を見学したり、獣医師や各動物の担当者から様々な話を聞いたりしては新たに知ることばかりで、勉強の日々です。



動物園にいる動物とペットとしての動物で大きく異なる点は、動物園の動物は調子が悪いことを隠そうとする、という

ことです。野生の動物は、調子が悪そうな素振りを見せては天敵に狙われてしまうのです。私が担当しているニホンリスが亡くなった際も、腎臓が正常の数倍の大きさになるような腫瘍を抱えながらも、当日の朝まで普段通りエサを食べていました。足に大量の膿が溜まっていたラマも、特に痛がる様子を見せずいつも通り歩き回っていました。

動物たちの健康を守るためには、日々動物たちの様子をよく観察し、わずかな変化も見逃さないようにすることが大切ですが、異常が見られてからはまさに時間との勝負で、迅速に適切な治療を行わなければならない、ということを実感しています。

少しでも早くこれらを実践できる獣医師となれるよう精進したいと思います。